

題 言

緊張したる横濱港の工事

日本の大負傷は先づ土木者の手に依りて其一部分を癒された。大震害後の横濱は實に痛ましい荒廢であつた、それが先づ港灣から復舊された。日本人が復興の意氣は短期間に既に此の活動を示す。

大震災後一ヶ年半、偉大なる技術的緊張を繼續して復舊完成されたる横濱港の震害復舊工事の如きは土木界近時の素晴しき壯觀である。此の一千萬圓を投じたる大なる臨海工事を、比較的少數なる人員を以て、一ヶ年半の短期間に竣功なし得た事は日本に於ける工事として異例な事ではあるまいか。我々は此の工事に於て我國の實地の技術が大なる進歩を現はした事を十分に認め得る。

本誌が今回特輯號として横濱港震害復舊工事を紹介する事は、此の緊張味の内に隠れたる技術者の犠牲的努力の一端を世に傳へんが爲である。

内相の言は強し

社會状態が復雜になつて來ると、自分の職務を正當に實行する事すら非常な努力を要する。

若槻内務大臣は震災後の帝都復興計劃の遂行は『單に復興局の仕事にあらずして内務大臣の責任である、即ち内閣の責任である、自分はこの計劃に關し第一線に立つの決心を有してをる』云々云はれた、此の言明に對して復興事業に従事せる多數技術者は非常に心強さを感じるであらう。此の内相の下に於てこそ偉大なる技術が實行されなければならぬ。

然し我々は復興事業が内閣の責任である如く、又我々國民の責任である事を感じる。復興の第一線に立つもの豈一人内相のみではない、常に開拓實行の第一線に立ちつゝある技術者と共に又一般國民が眞劍なる努力を捧げなければならぬ問題である。

工事研究獎勵の實行

今更ら工事の研究さか獎勵さかを述べる場合でないが、兎に角現場工事の進歩せざる事は我國の大なる病患である。

設計に於ては敢て歐米先進國の技術者に劣らざる今日、我國の現場工事のみが彼等に劣る事云ふ事は如何なる理由であらうか。最早今日では國情の相違さか、經濟力の相違さか、そんな生ぬるい事を云ふてをる場合ではない。

現場の工事は總てが眞面目なる實行の事實である。若し之を度外視したならば工事は必ず失敗する。如何にして眞面目なる實行に努力すべきか、此は技術者各人が自ら考へて見なければならぬ問題である、而して其處に又種々なる理由を發見するであらう。

本誌が工事研究獎勵部を設置して種々なる方面から工事の進歩獎勵を謀らんことをに際し、特に眞劍なる技術家の贊成を得んことをするものである。